

# 立教大学図書館蔵「〈薩琉軍記〉コレクション」をめぐる

## 目黒将史

### 一 はじめに―〈薩琉軍記〉研究の淵源―

〈薩琉軍記〉とは、慶長十四年（一六〇九）の琉球侵攻を描いた軍記テキスト群の総称である。琉球侵攻を題材にしているが、実際には起きていない合戦を作りだし、様々な武将たちの活躍を創出している。貸本文化を介して、主に写本で流通し、百点を超すおびただしい伝本が残されている。そのほとんどは十七〜十八世紀にかけて成立しており、近世中、後期の日本（ヤマト）側から見た琉球像を知るための恰好のテキストである。

琉球侵攻については、史学の立場からすでに多くの研究がなされているが、〈薩琉軍記〉は架空の合戦を描いた物語として取り扱われず、文学の立場からも、仲原善忠が『琉球属和録』などを「でたらめな稗史小説である」と紹介した程度で、研究の俎上に載せられることはほとんどなかった。近世文学研究の立場からも、主に写本で流布した〈薩琉軍記〉には焦点が当てられず、横山邦治によって、『絵本琉球軍記』出版に関わる文化元年（二八〇四）

の出版統制をめぐる論考があるにとどまっている<sup>②</sup>。近年、実録の研究として江戸期の写本を取り扱う研究が活発化してきているが、主として〈薩琉軍記〉を取り上げる研究はなされてこなかった。

〈薩琉軍記〉に注目が集まったのは、小峯和明による琉球をめぐる文学言説群の再発掘によるものである<sup>③</sup>。これにより、あらためて〈薩琉軍記〉が着目され、ようやく研究の幕が開けたといつてよい。小峯は、〈薩琉軍記〉を秀吉の朝鮮侵略に関連づけ、蒙古襲来とともに、侵略言説と侵略文化総体の「侵略文学」として位置づけ、〈薩琉軍記〉の意義や問題点をまとめている<sup>④</sup>。また、出口久徳により〈薩琉軍記〉の書名分類、一覧の作成が行われており、これまでの拙稿の下地は小峯、出口の研究を受け継ぐものである<sup>⑤</sup>。

これ以後、立教大学小峯研究室蔵として伝本蒐集が行われ、この度立教大学図書館へ一括登録することになった<sup>⑥</sup>。〈薩琉軍記〉の伝本は数多く残されているが、これほど多量の伝本を保管している機関はなく、また、所謂、筋のいい伝本も多く含まれている。

よって、今後立教大学図書館が〈薩琉軍記〉研究のターミナルとして大いに活用されていく必要性があり、ここにコレクションの紹介と立教大学図書館所蔵本の問題点を指摘しておきたい。

## 二 立教大学図書館〈薩琉軍記〉コレクション概観

現在、立教大学図書館に所蔵されている〈薩琉軍記〉は以下の十八点である。丸数字の上に★印をつけたものは、諸伝本と比較して立教本特異の叙述を持つ注目すべき伝本である。各伝本の書誌と共に紹介したい。

### ① 立教大学〈薩琉軍記〉コレクション一覽

#### ① 薩琉軍談〈甲系〉

〔登録番号〕 NDC:219.7//SA88、52281000

〔刊写・年時〕写本・文化十三年（一八一六）

〔外題〕薩琉軍談（簽・書・原）

〔内題〕薩琉軍談 〔表紙〕原表紙、無紋、茶

〔見返し〕原見返し、本文共紙 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕二卷一冊 〔寸法〕二十四・一×十七・〇糎

〔丁数〕85丁 〔用字〕漢字・平仮名

〔絵画〕白描（馬印、旗印） 〔蔵書印〕朱角印（見返し）

〔奥書〕文化十三丙子歳六月写之、清兼 〔備考〕補修アリ

〔翻刻〕拙稿「翻刻『薩琉軍談』（池宮正治・小峯和明編

『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまな

み』三弥井書店、二〇一〇年）

#### ② 薩琉軍談〈甲系〉

〔登録番号〕 NDC:219.7//R98、52281601

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕琉球征伐軍記（簽・書・原）

〔内題〕琉球征伐軍記 〔表紙〕原表紙、無紋、薄青

〔見返し〕原見返し、本文共紙 〔料紙〕楮紙

〔装訂〕袋綴 〔数量〕二卷一冊、前半部のみ現存

〔寸法〕二十四・〇×十七・〇糎 〔丁数〕42丁

〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕ナシ

〔奥書〕ナシ 〔備考〕ナシ

#### ★③ 薩琉軍談〈乙系〉

〔登録番号〕 NDC:219.7//SA88、52182488

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕薩琉記（直・書・後）

〔内題〕薩琉軍記 〔表紙〕原表紙、無紋、栗皮

〔見返し〕後見返し 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕四卷一冊 〔寸法〕二十六・五×十七・〇糎

〔丁数〕71丁（遊紙アリ） 〔用字〕漢字・平仮名

〔絵画〕白描（馬印、旗印） 〔蔵書印〕ナシ

〔奥書〕信■本領踐入住／山本淳義蔵書（最終丁、■〃〔州

「松」の併せ字か）、信州松本安曇郡穂高組踏入本郷／山

本家蔵書（遊紙） 〔備考〕山本淳義□（表紙書入）

#### ④ 薩琉軍談〈乙系〉

〔登録番号〕 NDC:219.7//SA88、52281604-52281605

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕薩琉軍談（木簽・書・原）

〔内題〕ナシ 〔表紙〕原表紙、刷毛目、茶

〔見返し〕破損 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕二卷二冊 〔寸法〕二十四・四×十八・三糎

- ⑤  
〔丁数〕上巻・33丁、下巻・24丁 〔用字〕漢字・平仮名  
〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕朱角印二種、墨丸印（一才右）  
〔奥書〕ナシ 〔備考〕永瀬氏蔵本（表紙書人）  
**薩琉軍談〈丙系〉**

〔登録番号〕NDC:219.7//SA88、52281604-52281605  
〔刊写・年時〕写本・文政十二年（一八二九）  
〔外題〕薩琉軍談（簽・書・原） 〔内題〕薩琉軍談  
〔表紙〕原表紙、無紋、茶 〔見返し〕原見返し  
〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴 〔数量〕六巻二冊  
〔寸法〕二十四・二×十七・二糎  
〔丁数〕上巻・35丁、下巻・41丁（遊紙アリ）  
〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕白描（馬印、旗印）  
〔蔵書印〕ナシ 〔奥書〕上巻・文政十二年／丑七月朔日山  
本長悦／拾四歳／福島より／うつす、下巻・文政十二年丑  
年／七月朔日／山本氏 〔備考〕ナシ

⑥ **薩琉軍談〈丙系〉**

〔登録番号〕NDC:219.7//SA88、52281606-52281608  
〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕薩琉軍談（簽・書・原）  
〔内題〕薩琉軍談 〔表紙〕原表紙、刷毛目、薄茶  
〔見返し〕原見返し 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴  
〔数量〕六巻三冊 〔寸法〕二十四・六×十六・八糎  
〔丁数〕上巻・42丁、中巻・31丁、下巻・48丁（遊紙アリ）  
〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕白描（馬印、旗印）  
〔蔵書印〕ナシ 〔奥書〕ナシ 〔備考〕ナシ  
**薩琉軍鑑**

⑦ **薩琉軍鑑**

★  
⑧ **薩琉軍鑑**

〔登録番号〕NDC:219.7//SA88、52281609-52281610  
〔刊写・年時〕写本・天保十五年（一八四四）  
〔外題〕薩琉軍鑑（簽・書・原） 〔内題〕薩琉軍鑑  
〔表紙〕原表紙、無紋、濃茶 〔見返し〕原見返し  
〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴 〔数量〕二巻二冊  
〔寸法〕二十七・九×十九・二糎 〔丁数〕上巻・32丁、下  
巻・31丁 〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕ナシ  
〔蔵書印〕墨丸印（上巻末尾）、墨印（花押型、下巻末尾）  
〔奥書〕天保拾五年辰正月吉日／倉下屋吉承郎持主／行年拾  
七才写之 〔備考〕ナシ

⑨ **薩琉軍鑑**

〔登録番号〕NDC:219.7//SA88、52281612  
〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕薩琉軍鑑（簽・書・原）  
〔内題〕薩琉軍鑑 〔表紙〕後表紙、無紋、薄茶  
〔見返し〕後見返し 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕四卷一冊、前半部のみ現存

〔寸法〕二十二・二×十六・三種 〔丁数〕65丁

〔用字〕漢字・片仮名 〔絵画〕白描(馬印、旗印)

〔蔵書印〕ナシ 〔奥書〕丁酉二月二十六日 〔備考〕ナシ

★  
⑩ 薩琉軍鑑

〔登録番号〕NDC:219.7//SA88・52281613~52281616

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕薩琉軍鑑記(簽書・原)

〔内題〕薩琉軍鑑記 〔表紙〕原表紙、稻穂紋、銀

〔見返し〕原見返し、本文共紙 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕八卷四冊 〔寸法〕二十五・五×十五・四種

〔丁数〕一冊・27丁、二冊・28丁、三冊・25丁、四冊・16丁

〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕ナシ

〔奥書〕ナシ 〔備考〕清水喜左衛門(見返し書入)

⑪ 琉球静謚記

〔登録番号〕NDC:219.7//R98・52281617~52281618

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕島津琉球軍記(直書・後)

〔内題〕琉球征伐記 〔表紙〕原表紙、布目紋、薄茶

〔見返し〕原見返し、本文共紙 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕五卷二冊 〔寸法〕二十二・六×十六・六種

〔丁数〕上巻・48丁、下巻・65丁 〔用字〕漢字・平仮名

〔絵画〕白描(馬印、旗印) 〔蔵書印〕ナシ 〔奥書〕ナシ

⑫ 琉球静謚記

〔登録番号〕NDC:219.7//R98・52281619~52281620

〔刊写・年時〕写本・天保十年(一八三九) 〔外題〕破損

〔内題〕琉球征伐記 〔表紙〕原表紙、無紋、藍

〔見返し〕原見返し、本文共紙 〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴

〔数量〕三卷三冊 〔寸法〕二十四・九×十七・二種

〔丁数〕上巻・34丁、中巻・34丁、下巻・39丁

〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕墨丸印(秩

父/日野沢/高橋)、墨角印、緑角印(一才右上)

〔奥書〕皆天保十丁亥初秋吉日 高橋直古写之 〔備考〕ナシ

⑬ 島津琉球合戦記

〔登録番号〕NDC:219.7//SH46・52182485

〔刊写・年時〕写本・未詳 〔外題〕ナシ

〔内題〕島津琉球合戦記 〔尾題〕琉球合戦記

〔表紙〕原表紙、無紋、薄茶 〔見返し〕原見返し、本文共紙

〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴 〔数量〕一卷一冊

〔寸法〕二十二・七×十五・七種 〔丁数〕55丁(遊紙アリ)

〔用字〕漢字・平仮名 〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕ナシ

〔奥書〕ナシ 〔備考〕ナシ

★  
⑭ 琉球軍記

〔登録番号〕NDC:219.7//R98・52281622

〔刊写・年時〕写本・寛政七年(一七九五)

〔外題〕琉球軍記(簽書・原) 〔内題〕琉球軍記

〔表紙〕原表紙、無紋、縹 〔見返し〕原見返し、本文共紙

〔料紙〕楮紙 〔装訂〕袋綴 〔数量〕三巻一冊

〔寸法〕二十三・八×十七・二種 〔丁数〕60丁

〔用字〕漢字・片仮名 〔絵画〕ナシ 〔蔵書印〕朱方印(近藤)、不明朱方印・朱丸印各一種 〔奥書〕寛政七乙卯年

正月上旬写之、近藤姓 「備考」補修アリ

〔翻刻〕拙稿「立教大学小峯研究室蔵『琉球軍記』解題と翻刻」(立教大学大学院日本文学論叢)7、二〇〇七年八月)

⑬ 島津琉球軍精記

〔登録番号〕NDC:219.7//SH46' 52151621~52151637

〔刊写・年時〕写本・未詳

〔外題〕島津琉球軍精記(簽・書・原)

〔内題〕島津琉球軍精記 「表紙」原表紙、無紋、紅(一)

五卷)、栗皮(六〇十五卷)、薄緑(十六〇二十三卷)

〔見返し〕原見返し、本文共紙、落書あり 「料紙」楮紙

〔装訂〕袋綴 「数量」二十一卷十七冊、卷一〇十二・十四

二十二のみ現存 「寸法」二十三・〇×十五・六糎

〔丁数〕1冊19丁、2冊24丁、3冊23丁、4冊24丁、5冊18

丁、6冊27丁、7冊27丁、8冊18丁、9冊40丁、10冊16丁、

11冊21丁、12冊19丁、13冊19丁、14冊47丁、15冊51丁、16

冊48丁、17冊48丁 「用字」漢字・平仮名 「絵画」ナシ

〔蔵書印〕朱角印(柏木文庫、墨角印(本政)、墨扇型印(本

安)、墨丸印(善)、墨角印(本萬)、墨丸印(之齋)、墨角印

(本所)緑町/三丁目/本政) 「奥書」ナシ

〔備考〕卷九と卷十は合綴

⑭ 島津琉球軍精記

〔登録番号〕NDC:219.7//SH46' 52218346~52218348

〔刊写・年時〕写本・未詳

〔外題〕島津琉球軍精記(簽・書・原)

〔内題〕島津琉球軍精記 「表紙」原表紙、ハケ目、茶

〔見返し〕原見返し、本文共紙 「料紙」楮紙 「装訂」袋綴

〔数量〕二十七卷三冊 「寸法」二十七・〇×十六・六糎

〔丁数〕1冊114丁、2冊98丁、3冊72丁 「用字」漢字・平仮名

〔絵画〕ナシ 「蔵書印」ナシ 「奥書」ナシ 「備考」ナシ

★⑮ 絵本琉球軍記前篇

〔登録番号〕NDC:913.56//MI84' 52281624~52281633

〔刊写・年時〕刊本・天保六年(一八三五)

〔外題〕絵本琉球軍記(簽・刷・原)

〔内題〕〈為朝/外伝〉鎮西琉球記初編

〔柱〕絵本琉球 「表紙」原表紙、島津十字紋、青

〔見返し〕原見返し、黄、絵あり 「料紙」楮紙 「装訂」袋綴

〔数量〕十卷十冊 「寸法」二十一・五×十五・〇糎

〔匡郭〕十七・一×十二・八糎

〔丁数〕1冊27丁、2冊19丁、3冊17丁、4冊26丁、5冊19

丁、6冊20丁、7冊22丁、8冊19丁、9冊18丁、10冊18丁

〔用字〕漢字・平仮名 「絵画」墨印 「蔵書印」ナシ

〔刊記〕天保六乙未年孟春/書林 京二条通り柳馬場西へ入

/吉田治兵衛/大阪心齋橋通北久宝寺町/天満屋安兵衛

〔備考〕米沢宮内/橋本屋文四良

⑯ 琉球属和録

〔登録番号〕NDC:219.9//R98' 52281623

〔刊写・年時〕写本・未詳 「外題」琉球属和録(簽・書・原)

〔内題〕琉球属和録 「表紙」原表紙、素紙

〔見返し〕原見返し、本文共紙 「料紙」楮紙

〔装訂〕袋綴 「数量」一卷一冊、巻二のみ現存

〔寸法〕 二十四・四×十六・二種 〔丁数〕 27丁

〔用字〕 漢字・平仮名 〔絵画〕 なし 〔蔵書印〕 ナシ

〔奥書〕 ナシ 〔備考〕 ナシ

### 三 立教本の特異性の考察

先の伝本一覽でも示したが、以下の伝本は他諸伝本と比べ立教本独自の叙述をもつものであり注目される。紙幅の都合もあり、簡単に述べていきたい。

#### a. ③ 薩琉軍談（乙系）について

島津氏には源頼朝を始祖とする始祖伝説がある。ここではこの始祖伝説を仮に「島津家由来譚」と呼びたい。この伝承は島津氏の正史として位置づけられ、島津氏の基本史料である『島津国史』でも起点にもなっている。この由来譚が（薩琉軍記）でも語られ、物語の結末に結びつく重要な伏線となるのである。当本ではこの「島津家由来譚」に独自の叙述が加えられている。

物語の始まりは共通しており、頼朝と丹後局とが懇ろの中になり、丹後局が懐妊することに端を発する。丹後局は嫉妬した御台政子に狙われ住吉にくだっていくのだが、難波を過ぎると辺りが暗くなり、雷雨が激しくなる。方角も分からなくなり、迷っていると、南の方に夥しい火を目撃する。南に人家があるのだろうかと思ねると、そこに一つの御堂があった。そこには六、七人の僧が読経をあげている。局はここで産気づき、老僧の膝の上で出産する。すると、たちまちに僧や堂が消え、闇が去り、晴天になる。

局は石仏の地蔵の台座の上で出産していた。局は日々地蔵尊を信仰していたので、このような靈験にあずかったのだとされる。まさしく地蔵靈験譚である。「島津家由来譚」では、地蔵の存在はみられず、稲荷の靈験譚として語られているのだが、ここでは地蔵が稲荷に取って代わった伝承になっている。他本で、狐火とさされていたものは、ここでは灯火を多数焚いているものであったと解釈される。

立教本の注には、「島津家系之条之事、後太平記八卷、西国大平記三卷、地蔵經直談抄四并十二卷等に委ク出有之」とある。『後太平記』（元禄五年（一六九二）刊）や『延命地蔵菩薩經直談鈔』（元禄十年（一六九七）刊）には島津忠国の地蔵信仰話が語られているが、立教本では、元禄期に享受された島津の地蔵靈験譚を（薩琉軍記）と結びつけ、新たな展開をみせているわけである。地蔵靈験譚の流入は、（島津家由来譚）の展開の一樣相をうかがう上で重要であると指摘できる。実に興味深い伝本といえよう。

#### b. ⑧ 薩琉軍鑑について

この伝本には、開聞岳を薩摩の中心に据えた琉球までの渡海絵図が描かれていることに注目される。琉球には、本来（薩琉軍記）に登場しない「程順則」の名前もみえる。この絵図については、すでに言及したことがあり、紙幅の都合もあるので、そちらに考察を譲りたい。<sup>8)</sup>

#### c. ⑩ 薩琉軍鑑について

内題を「薩琉軍鑑記」とする伝本は、管見の限り当本のみであ

る。物語の構成はA3『薩琉軍鑑』とほぼ一致しているが、aで着目した「島津氏由緒之事」が語られていない。また、佐野帯刀に対する「私評」では、『論語』を利用して独自の見解を述べている。さらに、「日頭山合戦」の後の「私評」がないことも、『薩琉軍鑑』とは異なっている。

#### d・⑭ 琉球軍記について

まず、(薩琉軍記) B系諸本について押さえておきたい(諸本表参照)。A系諸本は「島津家由来譚」を、頼朝の後胤で島津家の中興の祖「義俊」の出生譚として扱っているが、B系諸本では頼朝からつながる島津の祖「忠久」から二十代「綱貴」に至るまでの系譜を描いている。また、A系諸本は侵攻時の太守を「義弘」とするが、B系諸本では「家久」とする。歴史的事実として正しいのは「家久」であり、B系諸本には島津家の歴史を描く姿勢がうかがえるのである。これらのことから、B系諸本は薩摩藩に極めて近い立場(薩摩の歴史を考察するような立場)の人物により転写され、改変された可能性が高い。

それを踏まえて、当本をみてみよう。『琉球軍記』の結末はB系の特徴である寛文十一年(一六七二)の尚貞襲封、金武王子朝興の謝恩使来朝で物語が終わる。島津家久は琉球侵攻の結末を報告すべく琉球王を伴って駿府を訪れる。家久はその功により中納言に昇進する。その後、現在までの島津当主が描かれるのである。この叙述は伝本すべてに共通するものだが、ここでは現在の当主を忠洪(島津重豪、一七四五―一八三三)としているのだ。そこで注目されるのは伝本中で最も古い奥書である立教本の「寛政七

年(一七九五)」という書写年時である。島津忠洪は宝暦五年(一七五五)に藩主となる人物であり、藩主となったときに重豪と改名している。重豪は藩政改革を行った人物としても著名であり、島津氏の正史である『島津国史』の編纂も命じている。また、重豪は海外へ眼差しを向けた人物としても知られ、日本初の中国語辞書『南山俗語考』も刊行させている。

立教本の書写年時は、重豪、四十七才であり、藩政を斉宣に譲り、自身は『島津世家』などの改変を行っていく時期に重なり合う。言わば島津家が自己の歴史を確定していく時期に、それもその初期の伝本として注目できるのである。また、当本には「誠ニ朝鮮・琉球ノミナラズ、交趾・阿蘭陀・仏郎機万国共ニ従ヒナビク」と、アジア圏に留まらず西洋の国々の名が採りあげられる。重豪が志向する政策との一致が指摘できるわけだ。先に指摘したように、B系は島津家由来譚を島津家系譜として扱う系統の諸本であり、島津家の歴史を記そうとする意図が垣間見える。そのような特徴の中にある諸本において、重豪の存命中、しかも意欲的に自家の由来を確定しようとしていたなかの伝本として価値が見いだせるのである。

#### e・⑰ 絵本琉球軍記前篇について

立教本は最も早く出版された天保六年(一八三五)刊本であるが、翌年出版される天保七年刊本に対して、天保六年刊本は現存本が多くない。管見の限りでは、天保六年の完本は沖縄県立図書館蔵本、函館市立図書館蔵本とこの立教本だけであり(零本は他にもある)、貴重な伝本であると言えよう。

## 五 おわりに

ここまで粗々と立教本についてみてきた。先にも述べたように、〈薩琉軍記〉の伝本は数多く残されている。しかし、これほど多量の伝本を保管している機関は立教大学図書館以外にない。しかもバラエティーに富んだ諸本を所蔵している点でも他機関より抽んでている。さらに、A2『琉球攻薩摩軍談』、A4『琉球征伐記』などが揃うと、ほぼ諸本を概観できる状況になる。今後の蒐集にも期待したい。この度、立教大学図書館の御尽力により、申請すれば簡単に閲覧できるようにしていただいた。〈薩琉軍記〉研究のターミナルとして利用されることを切に望む。

最後に、人とも、書物とも、出会いは「縁」である。〈薩琉軍記〉との出合いの縁を与えていただいた小峯先生に感謝の辞を述べ末尾としたい。

### 注

- (1) 仲原善忠「琉球渡海日々記」(『沖縄文化』14、一九六四年一月)。
- (2) 横山邦治「絵本ものの諸相」(『読本の研究—江戸と上方—』風間書院、一九七四年)。
- (3) 小峯和明「中世・近世における琉球文学資料に関する総合的研究」(『科研報告書、二〇〇〇年〕。〈薩琉軍記〉研究の魁けとして野中哲照による伝本研究がある。『戦国軍記事典 天下統一篇』(『古典遺産の会編、和泉書院、二〇一一年〕に

取められた。また最近の論文に、小峯和明「〈侵略文学〉の文学史・試論」(『福岡大学研究部論集 人文科学編』12—6、二〇一三年三月)がある。

- (4) 小峯和明「〈薩琉軍記〉の範疇と意義—〈侵略文学〉の提唱」(注(4) 科研報告書)、同「琉球文学と琉球をめぐる文学—東アジアの漢文説話・侵略文学」(『日本文学』53—4、二〇〇四年四月)。

- (5) 出口久徳「薩琉軍記の伝本研究・諸本一覽」(注(3) 科研報告書)。これらの成果は、池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまなざし—』(三弥井書店、二〇一〇年)にまとめられている。その後、金時徳により「朝鮮軍記物」との関連への言及がなされ(金時徳「異国征伐戦記の世界 韓半島・琉球列島・蝦夷地」笠間書院、二〇一〇年)、井上泰至とともに異国戦争を題材とした物語群の問題性について指摘されている(井上泰至・金時徳「秀吉の対外戦争…変容する語りとイメージ」笠間書院、二〇一一年)。また、テキストの公刊も盛んになってきている。

- (6) 小峯研究室所蔵の〈薩琉軍記〉伝本は、科学研究費補助金(基盤研究B)「中世・近世における琉球文学資料に関する総合的研究」(一九九九〜二〇〇一年度、研究代表者・小峯和明)、科学研究費補助金(基盤研究B)「16〜18世紀の日本と東アジアの漢文説話類に関する総合的比較研究」(二〇〇二〜二〇〇四年度、研究代表者・小峯和明)の研究成果として蒐集されたものである。この度、小峯先生の定年にとりま

い、すべて図書館に移管された。

- (7) 書名は247頁の〈薩琉軍記〉諸本一覽表に準じる。諸本の詳細については、拙稿「薩琉軍記」概観（池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまなざし—』三弥井書店、二〇一〇年）に譲る。以下、立教大学図書館所蔵本を立教本とする。

- (8) 拙稿「琉球侵略の歴史叙述—日本の対外意識と〈薩琉軍記〉—」（青山学院大学文学部日本文学科編『日本と〈異国〉の合戦と文学—日本人にとって〈異国〉とは、合戦とは何か』笠間書院、二〇一二年）。

- (9) 『琉球軍記』成立時。『琉球軍記』には、「高祖島津忠久ハ右大将頼朝卿ノ三男トシテ、五百七十余年連綿ト栄ヘ」とある。島津忠久は、一七九九年の大晦日の生まれであるとするのが通説である。よって一七五〇年ころをさすと思われる。島津重豪は一七五五年に藩主となるので、ほぼその時期と重なり合う。参考、朝河貫一「島津忠久の生ひ立ち—担当批評の一例—」（史苑）12—4、一九三九年七月↓「島津忠久の生ひ立ち—低等批評の一例—」慧文社、二〇〇七年）。

- (10) 以下、島津重豪については、芳即正『島津重豪』（吉川弘文館、一九八〇年）、田村省三『尚古集成館 島津氏800年の収蔵』（尚古集成館、二〇〇三年）による。

- (11) 『島津国史』の完成は享和二年（一八〇二）。また、『大日本史』に島津家の始祖忠久の頼朝落胤説を補入するように依頼し実現している。ただし、『大日本史』はその内容については否定している。

#### 【付記】

本稿の執筆、〈薩琉軍記〉の図書館登録にあたり、鈴木彰氏、立教大学図書館の小泉徹氏、市村洋子氏のお世話になりました。記して感謝申し上げます。本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「異国合戦の歴史叙述—〈薩琉軍記〉にみる琉球侵攻—」（課題番号25・9592）の成果の一部である

（めぐろまさし 日本学術振興会特別研究員）

A 系

A1 薩琉軍談（甲系） ↓（乙系） A2 琉球攻薩摩軍談（虎竹城合戦、乱蛇浦、松原合戦の描写なし）

←（丙系） ↓ A3 薩琉軍鑑（佐野帯刀叙述の増幅、私評の付加、佐野帯刀を擁護）

- ・ 十八世紀初頭の成立 ↓ 宝暦七年（一七五七）には成立（国立公文書館本『薩琉軍鑑』本奥書）。
- ・ 物語の結末は、島津氏と琉球王家との婚姻。

A4 琉球征伐記

- ・ 喜水軒著 ↓ 伝未詳。
- ・ 物語の結末は、家久が駿府へ参勤。徳川の治世ひいては島津家を言祝ぐ。武家的思想。
- ・ 尾張（三河）における伝来。

A5 琉球静謐記

- ・ 稲荷靈験として由来譚を利用。
- ・ 物語の結末は、武断を咎める教訓的内容。

増2 琉球属和録

← これらを管見に入れる。

- ・ 島津家由来譚を始祖誕生譚として扱う。
- ・ 侵攻時の太守を「義弘」とする。
- ・ 明和三年（一七六六）には成立（増補系、10『琉球属和録』の成立年時による）。

B1 島津琉球合戦記

B2 琉球軍記

- ・ 註の付加、新納武蔵守を擁護
- ・ 琉球知識の大幅な増加
- ・ 十八世紀中頃成立

B3 島津琉球軍精記

- ・ 二十七卷（三十卷）に及ぶ物語の増広。

増1 絵本琉球軍記

← 大幅な物語の転換

- ・ 琉球知識の増広傾向。
- ・ 島津家由来譚を島津家系譜として扱う。
- ・ 稲荷靈験の引用。犬追物射方、高麗伝来の山雀の記事の採録。
- ・ 結末は、寛文十一年（一六七二）、尚貞襲封の金武王子朝興の謝恩使来朝。
- ・ 侵攻時の太守を「家久」とする。

増1 絵本琉球軍記

- ・ 前篇 ↓ 天保六年（一八三五）刊 ↓ 七年再版 ↓ 安政七年（一八六〇）再々版
- ・ 後篇 ↓ 文久四年（一八六四）刊（前篇の再々版）。
- ・ 唯一の版本。物語の時代設定が十二世紀。為朝の登場。侵攻の命令を頼朝がくだす。

増2 琉球属和録

- ・ 堀麦水（二七一八〜一七八三）著 ↓ 金沢の俳諧師、実録作者。
- ・ A系 7『琉球静謐記』を披見。自筆本あり ↓ 明和三年（一七六六）成立。
- ・ 前田利長の琉球侵攻への関与。

増3 薩州内乱記

- ・ 真田幸村が琉球へ。新納武蔵守は琉球にて戦死。

増4 薩琉軍記追加（琉球侵攻の後日譚）